

## ペルシア湾貿易の黎明期

—近年の考古学の成果を中心として—

荻野博

### I はじめに

アラビア海からホルムズ海峡をこえて、イランとアラビア半島のあいだを北西方に奥深く入りこんでいるペルシア湾は、古来から東西間を結ぶ交通路のひとつとして、重要な役割を演じてきた。すでに紀元前4世紀の後半には、アレクサンドロス大王の東征部隊の一部が、帰還に際して、インダス河口からペルシア湾頭までの航海を敢行しているし、ローマ帝国時代には、この湾からアラビア海に出て、インド方面とのあいだに海上貿易が行われたことが知られている。

しかし、ペルシア湾の交通・貿易は、アレクサンドロス大王の時代よりもさらに2,000年以上をさかのぼる長い歴史をもっている。メソポタミアに古代文明をうちたてたシュメール人、バビロニア人の残した泥章には、ペルシア湾およびさらにそのかなたのオマーン湾やアラビア海方面に位置する国々とのあいだに、貿易の行われたことを示唆するさまざまな記録が見られるのである。すなわち、これらの楔形文字文書には、海のかなたのディルムン Dilmun (Telmun), マガン Magan (Makan), およびメルッハ Meluhha と呼ばれる国々とのあいだの貿易や政治的関係・交渉などについての記録が見出される。たとえば、初期王朝時代の末期、前2450年ごろラガシュ王朝を開いたウル・ナンシェ Ur-Nanshe の治世には、「ディルムンの船が外地からの貢納として、木材をもたらした」ことが記録されている<sup>1)</sup>。またシュメール人を征服してアッカド王朝を創設したサルゴン Sargon 大王(前2370-2316)の治世には、ディルムン、マガン、およびメルッハからの船が首都アガデ Agade の波止場に停泊したことが記され、またかれの子マニシュトウス Manishtusu (前2306-2292)は船で「下の海」(ペルシア湾)を横ざり、32人の王とかれらの都市を破り、銀

の鉱山にいたるまでの国全体を打倒して、そこから石をとって、かれの彫像をつくらせたこと、次の王ナラム・シン Naram-Sin (前2291-2255)はマガンに遠征して、その王マヌイ Manui を殺し、またかれらの山で石を切り出してアガデに運び、彫像をつくったことが記録されている<sup>2)</sup>。その後のラガシュ第2王朝、ウル第3王朝、イシン・ラルサ王朝、バビロン第1王朝等の記録にも、ディルムン、マガン、およびメルッハ方面との交渉・関係の記事が見られ、金、銀、銅、紅玉髓、ラピス・ラズリ、象牙、真珠、木材、マガンの玉ねぎや葦、象牙製の多彩の鳥など、さまざまなものが輸入あるいは貢納されている。またメソポタミアからは、羊毛、毛織物、ごま油等が送られている<sup>3)</sup>。

これらの記録に見られるディルムン、マガン、メルッハが、今日のどこに当るかはあまり明瞭ではなく、学者のあいだにさまざまな見解の相違がある。とくに後代の前1000年紀の記録には、マガンおよびメルッハを東方ではなく、南方のエジプト、ヌビア(エチオピア)方面をさすと考えさせる記録があり、そのため後代には地名の転移があったのではないかとの推測も行われている。しかし、早期の記録に出てくる場合は、おおむねこれらの地はペルシア湾からオマーン湾、アラビア海方面の地域をさしているとする考え方が今日では有力であり、とくにディルムンについては、これをペルシア湾内のバハレーン島に比定する説が有力である。バハレーン島では1953年から10数年間にわたってデンマークの遠征隊が発掘を行い、ディルムンがバハレーンであるとの決定的な証拠はえられなかったが、この島がメソポタミアやインダス河流域方面と密接な関係のあったことを明らかにした<sup>4)</sup>。またマガン

1) Samuel Noah Kramer, *The Sumerians: Their History, Culture, and Character*, The University of Chicago Press, 1963, p. 53.

2) John Hansman, "A Periplus of Magan and Meluhha" (*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XXXVI, Part 3, 1973), p. 555.

3) *Ibid.*, p. 556.

4) デンマーク遠征隊の発掘については、この遠征隊の指導者の1人であったジョフリー・ピビイによる次の興味深いポルタージュがあり、この書は邦訳されている。Geoffrey Bibby, *Looking for Dilmun*, Collins, 1970

はとくに銅の産地として知られていたようで、アラビアがわのオマーン半島、あるいはその対岸のイランの南東部方面に、またメルッハについてはパキスタンあるいはインド西北部方面、すなわちかつてインダス文明の栄えた方面とする説が有力である。しかし、後代における地名の転移を否定的に考えて、マガンおよびメルッハははじめからエジプトおよびエチオピアを一貫してさしていたとする考えもあり<sup>5)</sup>、また最近インドのロミラ・サパーは考古学やとくに言語学的方面からこの問題にアプローチして、メルッハをインドのグジャラート地方に、マガンをシンドおよびバルチスタン方面に求め、さらにディルムンも西インドの一部に相当するという仮説を提唱している<sup>6)</sup>。

このようにメソポタミアの古代文明地帯と関係・接触の深かったディルムン、マガン、およびメルッハについては、今日なお明らかでない点が多いが、これらの地がペルシア湾、あるいはそのかなたのオマーン湾やアラビア海を船で航行しなければ到達できなかったところに位置していたことは、ほぼ疑いがない。またこれらの地から、メソポタミアの文明世界の必要とする鉱物資源、その他のものが輸送されていたことも明らかであり、すくなくとも文献資料の語るところでは、初期王朝時代の末期、すなわち前3000年紀の後半以後、ペルシア湾の海上貿易がある程度行われていたことは、否定することはできないであろう。

当時はアラビア海の北岸には、パキスタンを中心としてインダス文明が栄えており、シュメール、バビロニアの文明世界とのあいだに交渉のあったことが、考

古学的遺物の比較研究などによって明らかにされつつある。両文明世界間の交渉は、陸路イランを通っても行われたことが、この方面の考古学的調査・発掘から推測されるが、両者のあいだには海上の交通の行われた形跡も存在している。たとえば、西北インドのカンベイ湾の奥に位置しているインダス文明の遺跡であるロータル Lothal では、当時のドックと推定される構築物が発見されており、この町が当時港湾都市として繁栄したことが推定されている<sup>7)</sup>。またパキスタンのイランとの国境に近いところからは、ストウカゲンドール Sutkagen-Dor、またその東方にソトゥカコー Sotka-Koh のふたつのインダス文明の遺跡が発見され、これらの遺跡はペルシア湾方面への航海の前哨的拠点であったろうと推定されている<sup>8)</sup>。さらにまたデンマーク隊は、バハレーン島の北端の古代の港と推定されるカラアト・アル・バハレーン Qala'at al-Bahrain のもっとも下層の都市の発掘中に、メソポタミア式の円筒印章やインダス式の立方体の分銅などを発見している<sup>9)</sup>。これらやその他のもろもろの証拠は、海上を通してメソポタミアとインダス文明地帯との接触が行われたことを物語ってくれるものであろう。

以上に述べたように、ペルシア湾からオマーン湾、アラビア海方面では、前3000年紀の後半から海上の交通・貿易の行われたことを示すさまざまな徴証が見られるのであるが、それ以前にすでにペルシア湾を通しての海上交通や貿易の行われたことを示唆する考古学的徴証が、近年アラビア半島のペルシア湾沿岸で発見されている。小論ではそれらについて若干の考察を加えてみたい。

## II アラビア半島沿岸のウバイド式土器

アラビア半島のペルシア湾沿岸は、第2次大戦後、石油が採掘されるまでは、灼熱した不毛の砂漠地帯として、多くの人々から忘れられた存在であり、学術的調査・研究もあまり行われないうちにおかれていた。しかし戦後、豊富な石油の採掘によって一躍世界の耳

(Published in Pelican Books, 1972; 矢島文夫・二見史郎訳『未知の古代文明ディルムン——アラビア湾にエデンの園を求めて——』平凡社刊, 昭和50年)。以下の引用はペリカン・ブック版および邦訳による。

- 5) たとえばクレマーは、マガンやメルッハのような重要な国々についての地名の転移は、「合理的にたしかめられた決定的な証拠に基づくべきである」が、今日のところそのような証拠は見出されないとして、転移説を否定し、マガンおよびメルッハは前3000年紀においても前1000年紀においても、エジプトおよびエチオピアをさしている可能性が強いと主張している(Kramer, *op. cit.*, pp. 276 ff.)。
- 6) Romila Thapar, "A Possible Identification of Meluhha, Dilmun and Makan" (*Journal of the Economic and Social History of the Orient*, Vol. XVIII, Part i, 1975)。なおこの論文については、主としてサパーのあげている考古学的証拠について、これを否定的に考える次の批判論文がある。Philip K. Chakrabarti, "Gujarat Harappan Connection with West Asia: a Reconsideration of the Evidence" (*Ibid.*, Vol. XVIII, Part iii, 1975)。

- 7) ロータルの発掘者ラオの次の著書を参照。S. R. Rao, *Lothal and the Indus Civilization*, Asia Publishing House, London, 1973。もっともラオがドックと推定した構築物については、ドックではなく、貯水池であったろうとの次の反論もある。Lawrence S. Leshnik, "The Harappan 'Port' at Lothal: Another View" (*American Anthropologist*, Vol. 70, No. 5, 1968)。
- 8) George F. Dales, "Harappan Outposts on the Makran Coast" (*Antiquity*, Vol. XXXVI, 1962) 参照。
- 9) G. Bibby, *op. cit.*, pp. 371-372 (邦訳, 371-372頁)。



第1図 アラビア半島ペルシア湾岸略図 (xは古代遺跡)

目を集め、またナショナリズムの気運に乗って、沿岸諸国が次々に独立して、国際政治の上でも重要な地位を占めるようになった。それにともなって、学術的調査・研究も活発に行われるようになり、すでに触れたように、デンマーク隊によるバハレーン島の発掘が行われたのである。デンマーク隊の活動は、やがて対岸のアラビア半島にまで延び、クウェート、サウディ・アラビア、カタール、オマーン方面の遠征へと発展していった。その結果、この乾燥した砂漠地帯の諸所にチャート製の石刃、その他の先史時代の遺物が散布していることが知られ、さらにメソポタミアとの関連を

偲ばせる遺跡や遺物の発見へと導いていった。なかでも注目すべきは、南メソポタミアのきわめて早い文化段階に属するウバイド期やジェムデト・ナスル期の彩文土器に平行する土器が発見されたことである。

1968年サウディ・アラビアのペルシア湾沿岸で調査中のデンマーク隊員ジョfrey・ビビイは、熱心な遺物採集者であるアメリカ人女教師バークホルダー Grace Burkholder の採集した遺物を見せられたが、それらの中にフリント製のナイフやスクレーパーなどとともに、「暗褐色の彩色の幾何文様で装飾された薄手の、緑黄色の焼きの土器片」約200個があった。か

それは啞然として眺めながら、それらがウバイド式土器であることを知り、同時にかれがその直前に同じくサウディ・アラビア沿海のタールート Tarut 島で発見した「えたいの知れない黄色っぽい土器片」1個も、やはりウバイド式土器であることを覚った。200個ほどの土器片は、沿岸の石油基地ダハラン Dhahran から約60マイル北方の、沿岸から4分の1マイル離れた砂丘のあいだの低い丘で採集されたものであった<sup>10)</sup>。

ウバイド文化は、南メソポタミアで「それまでの原始農耕文化に萌芽的に存在していた種々の文化的要素を急激に発展させ」、「自給自足の村落から交易経済に基く都市へと展開してゆく基礎となった」文化であり、「神殿中心の村落が確立したのもこのころ」のことであるとされている。「淡黄色の地肌の上に菱形文・波状文・弧文・平行直線文・三角形文などを組み合わせ、黒顔料で彩文した」土器が、この文化の特色ある指標であり、それは南メソポタミアでは前5000年紀のはじめごろから前4000年紀の半ばごろまで続いた。またこの文化は南メソポタミアからやがて北方の北メソポタミア一円にひろがり、さらに西は地中海沿岸へ、東はイラン高原までおよんでいったのであって、その影響はさらにその東方のバルチスターン方面にまで認められている<sup>11)</sup>。

ウバイド文化はこのように広い範囲にわたって分布しているため、この文化が南メソポタミアに隣接する北東アラビア方面にまで波及することは、その地理的位置から見て決して驚くべきことではないが、このことが特色ある彩文土器の発見によって現実に立証されたのである。そして今日では、サウディ・アラビア領内で約40カ所の遺跡が知られており、またカタール半島の西海岸のドウハン Dukhan 南方のアル・ダアサ al Da'asa や同じく北方のラス・アバルク Ras Abaruk、またバハレーン島南西沿岸のアル・マルフ al-Markh でも発見されている<sup>12)</sup>。とくにサウディ・アラビアでは1972年に、当時シカゴ大学人類学科の大学院生で、現在はリヤドの Director of Antiquities の職にあるアブドゥルラー・ハッサン・マスリーによ

って調査が行われ、その報告書が1974年に刊行されている<sup>13)</sup>。わたくしはまだこの書を見ていないので、その詳細を知ることはできないが、ケンブリッジ大学のJ.オーツの紹介が *Antiquity* 誌に掲載されているので<sup>14)</sup>、以下これによってその概要を述べてみたい。

サウディ・アラビアのウバイド期に平行する上述の約40カ所の遺跡は、その多くが打製石器にまじって数個の彩文土器の破片が散布しているだけにすぎない程度のものであるが、4カ所はメソポタミアのものに匹敵するほどの大きな墳丘をなした遺跡である。マスリーはそのうち内陸に位置しているアイン・カンナス Ain Qannas、沿岸に位置しているドサリヤー Dosariyah およびアブ・ハミス Abu Khamis の3遺跡で発掘を行った。

アイン・カンナス遺跡は、マスリーが発掘する以前に、すでに遺物はほとんど失われており、表土も相当に荒らされていたが、ここでは沈澱物の一連の層位が明らかとなり、気候変化に関する貴重な資料がえられた。ここでは土器をともしない早期の層が認められたが、放射性炭素による年代測定によって前5000年紀または多分それよりやや早い時期に年代づけられる層は、激しい気候の変動のあとを示しており、比較的多雨の時期——といっても、湿度のわずかな上昇を示すだけであるが——と乾燥期が交互にくり返されたあとが見られる。すなわち、人間の占拠のあとは、泉の露頭の周囲に堆積した沈澱物によって識別される、泉から少量の水が流れた時期だけに限られ、泉の激しい流出期もしくは泉の全面的な活動停止期には、遺跡が放棄されたあとがうかがわれる。彩文土器はレベル4以降に現われるが、出土した土器はすこぶる白亜質に富んでおり、そのできも表面採集品より劣っていた。白亜質に富んでいるのは、泉からの激しい水の滲出作用によって変質した可能性がある。このことは、北メソポタミアのチョガ・マミ Choga Mami のウバイド期の井戸から発見された土器も、すこぶる白亜質に富んでいたことから類推されるという。いずれにしても、発掘された土器は表面採集品と年代的に大きな差があったとは考えられない。そして表面採集の土器片の多くは、ハジ・ムハンマド型の碗形土器の特色をそなえている。また土器が使用されるようになって、依

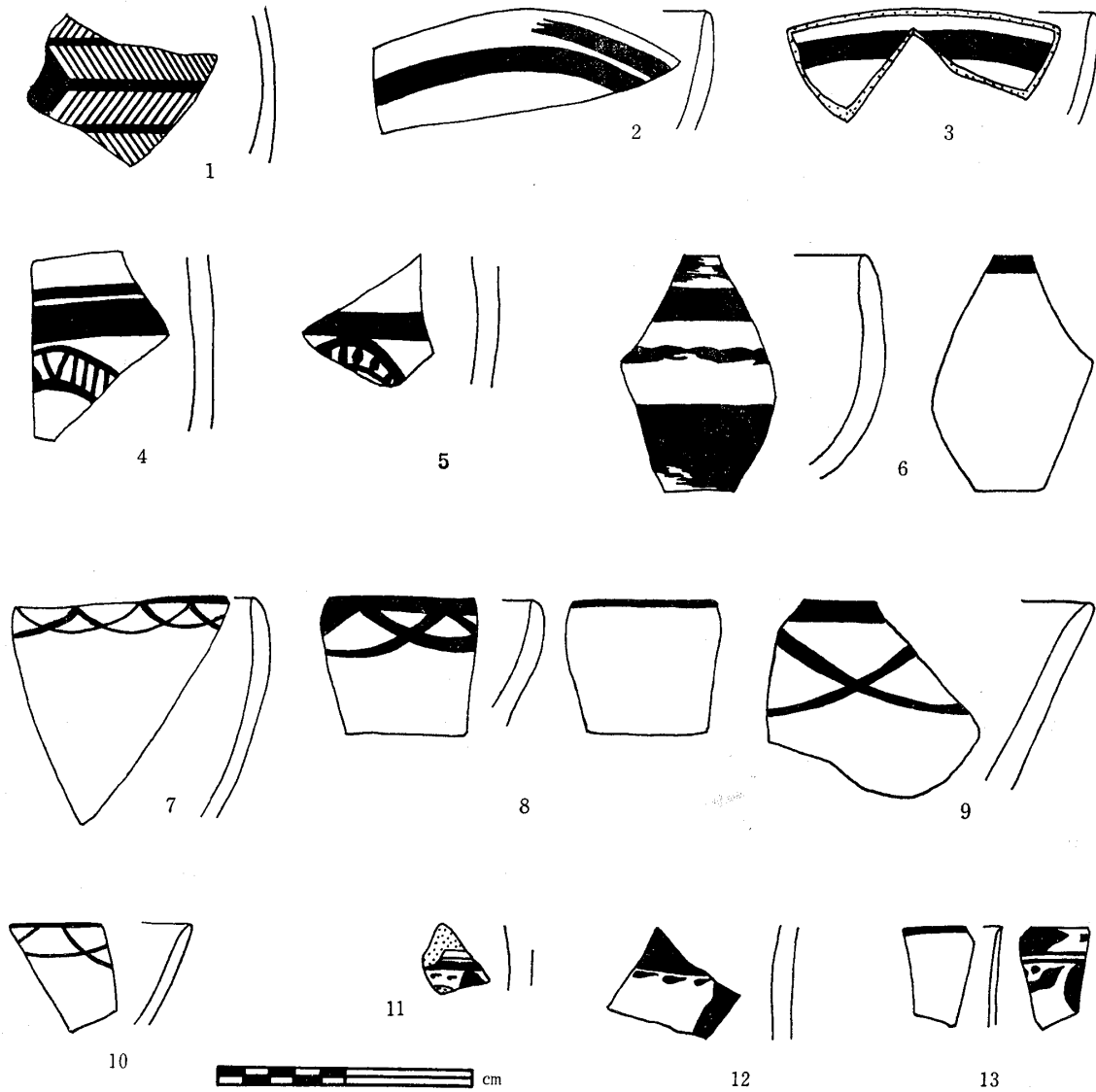
10) *Ibid.*, pp. 393-394 (邦訳, 395-396頁)。

11) 曾野寿彦著『西アジアの初期農耕文化』山川出版社刊、昭和49年、20-22頁。年代は Robert W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, The Univ. of Chicago Press, 1965 (4th impression), p. 176 の表による。

12) Beatrice de Cardi, "The British Archaeological Expedition to Qatar, 1973-1974" (*Antiquity*, Vol. XLIII, No. 191, 1974), pp. 197-198.

13) Abdullah Hassan Masry, *Prehistory in Northeastern Arabia: the Problem of Interregional Interaction*, Miami, Field Research Projects, 1974.

14) Joan Oates, "Prehistory in Northeastern Arabia" (*Antiquity*, Vol. L, No. 197, 1976).



第2図 メソポタミアおよびアラビア出土のウバイド式土器 (J. オーツの論文による)

- |                       |                              |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. アル・ウバイド (ウバイドⅡ) 出土 | 8. チョガ・マミ (ウバイドⅢ初期, 運河河床) 出土 |
| 2. アブ・ハミス (レベル7) 出土   | 9. ラス・アル・アミヤ出土               |
| 3. ドサリヤー (レベル4) 出土    | 10. "                        |
| 4. アブ・ハミス (レベル7) 出土   | 11. ドサリヤー (レベル2) 出土          |
| 5. ドサリマー (レベル4) 出土    | 12. アブ・ハミス出土                 |
| 6. ラス・アル・アミヤ出土        | 13. アブ・ハミス (レベル2) 出土         |

然として石器が使用されていたことが知られ、しかも石器の方がはるかに大量に発見されているので、アイン・カンナスの住民は土器が導入されたのちも、狩猟採集経済を営んでいたものと考えられ、とくに当時この地方に広生息していた大型哺乳動物、とりわけ equids の狩猟民であったと考えられる<sup>15)</sup>。

次に沿岸地帯のドサリヤーの遺跡は、多くの点でア

イン・カンナス遺跡と対照的である。ドサリヤーでも土器は地方的な石器とともに見出されるが、しかしこの遺跡では土器は全部の遺物包含層から発見されており、その大部分はウバイドⅢに相当するものであるという。とくにラス・アル・アミヤ Ras al 'Amiya 出土のものに酷似しているが、ラス・アル・アミヤは著しく多数のハジ・ムハンマド型の土器の出土するエリドゥⅪと多分同時代の遺跡である。ドサリヤーの最下層の年代は、放射性炭素による年代測定によって前

15) *Ibid.*, pp. 24-25. なお equids は奇蹄目の馬科の動物で、馬、驢馬、騾馬などがこれに属する。

4950±330年がえられた。この年代はアイン・カンナスでえられた2つの年代（レベル9の前5110±445年およびレベル11の前4705±320年）のあいだにある。またドサリヤー遺跡では、アイン・カンナスとは異なって、いっそう定住的な要素が強く見られ、牛、羊、山羊の骨が出土したが、それらは多分家畜化されていたようである。またこの遺跡の住民は狩猟ではなくて、海産物に大幅に依存する魚労民的要素が強くうかがわれる<sup>16)</sup>。

第3の墳丘であるアブ・ハミスは、サウディ・アラビアのウバイド的遺跡では最も北方の沿岸に位置している。この遺跡でもドサリヤーと同様に、全占拠期間を通じてウバイド式の土器が発見されたが、ここの彩文土器の多くは、ドサリヤーのものより年代的にはいく分のちのものようである。しかしここのレベル7とドサリヤーのレベル4出土の土器を比較すると、両遺跡が一部時期を等しくしていたことが想定される。またここの最下層からえられた土器片は、エリドゥのレベル XIII-X およびラス・アル・アミヤならびにチヨガ・マミで発見されたウバイドⅡ後期からⅢ初期の土器に類似している。他方、レベル2からえられた1破片は、エリドゥのもつとのちのレベル（神殿IX-Ⅷ）の土器と比較することができるという。放射性炭素のふたつの年代測定資料はレベル8からえられたものであるが、前3615±255年および前3710±250年の年代がえられた。オーツはこれを「人を惑わすほどにおそい」年代と評しており、遺跡の表面で採集されたふたつの測定資料からえられた前4185±120年および前3800±65年の方が、はるかにありそうな年代であろうといている。またアイン・カンナスでは発見されなかったが、ドサリヤーおよびアブ・ハミス、ならびに北方に位置している多くの遺跡からは、彩文土器とは別個の、粗野な土器の破片が多数発見されている。これらはわらを混入した家庭用の実用的な土器で、メソポタミアでも先史時代の多くの遺跡から発見されているが、サウディ・アラビアのものは明らかにこの地方でつくられた地方的製品であると考えられる。さらにアブ・ハミス遺跡で注目されることは、魚骨、その他の水産物の遺物が、ドサリヤーの場合以上に、発見された動物の骨において高い比率を占めていることで、とくに多数の真珠層の破片が層をなして発見されたこと、および小さな突きぎりやきりの形をした小型の石器が多数発見されたことである。このことはアブ・ハ

16) *Ibid.*, pp. 25-26.

ミスの住民が真珠の採取を行っていたことを示唆するものであろう<sup>17)</sup>。

サウディ・アラビアの以上の3遺跡を比較すると、最も南方の内陸部に位置しているアイン・カンナスの土器が、年代的には最も早いものようであり、ついでドサリヤー、ついでアブ・ハミスと続くものようであるが、しかしこれらの遺跡の最早期のレベルは年代的にはそれほど遠くへだたっているとは思われないという。また生活構造はそれぞれ異なっているが、どの遺跡も一貫して永続的に占拠されたものではなかったらしく、一時的放棄の時期があったことが、不毛な砂の層の介在によってうかがわれるという<sup>18)</sup>。

次にサウディ・アラビアに隣接するカタールでは、半島西岸のアル・ダアサで、淡黄色の地肌に緑がかった黒色の彩文のあるウバイド式土器の破片2個が、粗野なアラビアの土器片3個とともに発見された。オーツによれば、これらのウバイド式土器はハジ・ムハンマド型のものであるといい、またデ・カルディによれば、前4300-3500年ごろに年代づけられるという<sup>19)</sup>。またこれより北方のラス・アバルクでもウバイド式土器が発見されたが、ここには旧石器時代中期と新石器時代のタイプのふたつの時代のフリント製石器が広く分布している。新石器時代の遺跡からは、ひき臼、かもしかおよび *equids* の骨、多数の魚骨や貝殻、若干のビーズ玉やカタール以外の地に産する材料でつくられた石器の破片などが発見された。そして発見者のミスは、この遺跡がアル・ダアサよりは、むしろウバイド式土器の発見されたサウディ・アラビアのダハラ方面とのあいだに関係のあることを示唆しているという。またオーツはここで発見されたウバイド式土器は、年代的にウバイドⅣよりのちのものであろうと推定している。またバハレーン島のアル・マルフ発見のウバイド式土器も同様であろうとしている<sup>20)</sup>。

アラビア半島北東部の先史時代の研究は、まだ緒についたばかりで、その資料も十分ではなく、これらの遺跡や遺物がなにを語っているのかということは、まだあまり明らかではない。しかし、この地方は当時は今日のように激しい乾燥地帯ではなかったようである。

17) *Ibid.*, p. 26.

18) *Ibid.*, p. 26.

19) *Ibid.*, p. 26; de Cardi, *op. cit.*, pp. 197-198. なおデ・カルディは単にウバイド式土器片5個と書いている。

20) de Cardi, *op. cit.*, p. 198; J Oates, *op. cit.*, pp. 26-28.

このことはアイン・カンナスの発掘からも推測される  
ところであるが、アラビア半島を含む中近東地方や北  
アフリカの乾燥地帯が乾燥化しはじめるのは、紀元前  
3000年紀の中ごろからであると考えられており、そ  
れ以前の約3000年間は、現在の気象条件とは異なっ  
て、比較的温暖・湿潤であり、豊かな動植物にも恵ま  
れていたようである<sup>21)</sup>。石器時代の採集民が広く北東  
アラビア地方に住んでいたことは、そうした気象条件  
に恵まれていたからであり、またウバイド式土器を使  
用した住民も、まだ乾燥化のはじまる以前の存在であ  
ったと考えられる。しかしそれにしても、ウバイド式  
土器はどのような経路をたどって、この地方に入って  
きたものであろうか。

今日までのところ、ペルシア湾に沿う北東アラビア  
地方では、ウバイドⅠに相当する土器は発見されてい  
ない<sup>22)</sup>。あるいは将来発見されるかもしれないが、現  
在までの証拠からすれば、ウバイド文化が北東アラビ  
アでおこって、そこからメソポタミアへ伝播したと考  
えるよりは、ウバイド文化の本拠である南メソポタミ  
ア方面からこの地方へ伝播したと考える方が自然であ  
らう。ウバイド文化が南メソポタミアから北メソポタ  
ミア、地中海沿岸、イラン方面へと広く伝播していっ  
たことから、そのように考える方が合理的であらう。  
そのように考えた場合、北東アラビア方面への伝  
播の経路としては、陸路と海路のふたつを考慮するこ  
とができよう。いままでのところでは、最も南方の内陸  
部に位置しているアイン・カンナスで、最も古いと考  
えられる土器が発見されており、またこの遺跡の住民  
は狩猟採集民であったと推定される。マスリーはこの  
ようなことを根拠として、北東アラビア地方に分布し  
ていた遊牧的狩猟採集民の「相互作用」によって、ウ  
バイド文化がアイン・カンナスに伝播してきたものと  
考え、その伝播の経路のひとつとして、ワディ・バテ  
イン Wadi Batin をあげている。この潤河はバスラ  
の南方からイラクとクウェートの国境に沿い、ついで  
サウディ・アラビア方面に延びているもので、当時は  
おそらく常時水をたたえていたものと考えられる<sup>23)</sup>。

しかし、陸上とならんで、ペルシア湾上を海路伝播  
した可能性も考えられよう。第1に、ウバイド式土器  
を出す遺跡の多くは、沿岸もしくは沿岸に近いところ  
に位置している。カタール半島のウバイド式土器も、

いずれも沿岸地帯で発見されている。第2に、マスリ  
ーの発掘したドサリヤーおよびアブ・ハミスの遺跡  
は、当時の住民の生活が海洋に依存していたことを物  
語っている。前者は漁業に、後者は真珠採取にと、そ  
れぞれ生活構造が異なっていたことが、その出土資料  
からうかがわれはするが、かれらが海を生計の主要な  
場としていたことは、疑いないように思われる。とく  
にこの方面の海域は、真珠の採取が早くから行われ、  
ギリシア、ローマ時代の古典作家たちは、パハレーン  
島が真珠採取の中心地であったことを述べているが、  
デンマーク隊もこの島の南西海岸の貝塚を発掘し、堆  
積している貝のほとんどが真珠貝であり、出土した土  
器から前3000年紀にすでにこの島で真珠の採取が行わ  
れていたことを明らかにしている<sup>24)</sup>。いずれにしても、  
これらのウバイド式土器の使用者たちが、海の民であ  
ったことは疑いがないように思われる。

このような点から考えると、とくに沿岸地帯のウバ  
イド式土器は、ペルシア湾を通過して海路によってメソ  
ポタミア方面から伝播したものと考えられ、ひいては  
この方面の海上交通および貿易が、早くも前5000年紀  
から4000年紀の半ばごろにかけて行われたことが推測  
されるのである。J. オーツもウバイド文化の海路によ  
るアラビアの沿岸への伝播を示唆するとともに、前  
3000年紀以降に見られるペルシア湾貿易に触れながら、  
「いっそう大胆な商業的要因が、もっと早期の関係に  
おいても、同様に基礎的なものであったかもしれない  
との提唱——もっともマスリーはこれに賛成しないこ  
とはほぼ確実であるが——をしなくてはならないであらう。い  
くつかの観察しうる事実によって、この見解に信頼を  
おきたくなる」と述べ、また「利用しうるデータは、  
(中略)すでに前5000年紀のはじめにシュメールと湾  
のこの部分とのあいだの海上からの接触の可能性を強  
く示唆してくれる」とも述べている<sup>25)</sup>。もとよりメソ  
ポタミアにおける土器の編年については、今日なお種  
種の見解の相違があるようであり、また北東アラビア  
のウバイド式土器についても、資料がまだきわめて不  
十分であって、今後いっそうの調査・検討を要する面  
が多いことはいうまでもなからうが、前5000年紀のい  
つごろかから4000年紀の前半にかけて、メソポタミア  
と北東アラビア沿岸地方とのあいだに、ペルシア湾を  
通して交通・貿易が行われたと推測することは、それ  
ほど非合理的ではないように思われる。

21) 中島健一著『河川文明の生態史観』校倉書房刊、1977年、66頁。

22) J. Oates, *op. cit.*, p. 22.

23) *Ibid.*, pp. 25 & 28.

24) G. Bibby, *op. cit.*, pp. 172-174 (邦訳、161-163頁)。

25) J. Oates, *op. cit.*, pp. 29 & 30.

ところで、アブ・ハミスの住民は真珠採取者であったと推測されるわけであるが、メソポタミアのウバイド期の遺品の中に真珠があるかどうか、寡聞にしてわたくしはその例を知らない<sup>26)</sup>。またこの時期には、金属器の遺品もあまり多くないようである。しかし曾野寿彦氏は、ウバイド期の斧や鎌のような利器の土製模造品が、単なる模造品ではなくて実用品であり、その形は金属器に出たものと考えられること、とくに柄を挿入するためのソケットのある有孔斧は、明らかに鋳造された銅斧の模造と考えられることから、メソポタミアでは鋳銅の技術がウバイド期には相当に進んでいたものと推定している<sup>27)</sup>。またこの時期の装身具には腕飾り、頸飾りなどがあり、それらに用いた玉の材料には水晶、軟玉、蛇文岩、赤鉄鉱、滑石、凍石、ラピス・ラズリ、象牙、貝など、さまざまなものが見られるという<sup>28)</sup>。そうだとすれば、たとえ現物は発見されていなくても、ペルシア湾を産地とする真珠がこれらの装身具に使用された可能性は相当にあるように思われる。それはともかく、銅をはじめとする金属類や上述の玉の諸材料は南メソポタミアには産しないので、すでにこのような早い時代に、南メソポタミアが外界と接触・交渉をもったことは、十分推測されることである。すでに述べたように、ウバイド期の南メソポタミアは、まだ自給自足的傾向の強い村落経済の段階にあったと考えられるが、これらのことからみて、外界とのあいだにある程度の交換が行われたものと考えてさしつかえなからう。そうだとすれば、当時ペルシア湾を通して、南メソポタミアと北東アラビア沿岸とのあいだに、なんらかの交通・貿易が行われたとすることは、あながち無理な推定ではないと考えられる。

### III オマーン半島のジェムデト・ナスル式土器

南メソポタミアでは、前4000年紀の中ごろにウバイド期からウルク期に移行し、ついで4000年紀の末ごろには次のジェムデト・ナスル期に移行するとされている。そしてウルク期中期からジェムデト・ナスル期にかけて文字の発明が行われ、神殿の財産管理や計算書などの実務的な方面に用いられるようになった。

26) ウルク期Ⅲ a の遺品の中には若干の真珠のビーズがあるという (Elizabeth C. L. During Caspers, "New Archaeological Evidence for Maritime Trade in the Persian Gulf during the Late Protoliterate Period" [East and West, New Series, Vol. 21, Nos. 1/2, 1971], p. 33).

27) 曾野寿彦, 前掲書, 21頁.

28) 前掲書, 21頁.

したがって、この時期はまた原文字期 protoliterate period とも呼ばれており、ジェムデト・ナスル期はとくに原文字期後期 (C, D) として、それ以前の時期と区別されている。そして前2900年代に初期王朝時代へと移っていったようである<sup>29)</sup>。

ウルク期からジェムデト・ナスル期にかけてのころは、南メソポタミアではようやく自給自足的な村落にかわって、交易経済の上に立つ規模の大きな都市が出現するようになり、神殿に富と権力が集中し、灌漑および犁耕による農業生産もたかまり、それに応じて、金、銀、銅をはじめ、瑪瑙、水晶、ラピス・ラズリ、ガラスなどの金属、貴石類を用いた美術工芸も発達してきた。これらのものは沖積平野である南メソポタミアには産しないので、いずれも外地から獲得されたものであると考えられ、外地との貿易関係もいっそう発達してきたことがうかがわれる。土器もウルク期の初期には轆轤が使用されるようになり、無文のものが主体となって、注口土器や斜めに外方に切りおとした口縁部をもつ碗などがつくられるようになったが、ジェムデト・ナスル期になると、ウルク期の伝統をひいた土器のほかに、肩で強く稜の張った壺形土器や底部の内がわに栓状のつまみのある碗など、特色ある土器が現われてくる。彩文もクリーム色あるいは赤色の地肌の上に、赤色もしくは黒色の顔料を用いて、幾何文、動植物文、人物文を描いた多彩文土器が、単彩文や刻文土器とともに製作されるようになった<sup>30)</sup>。

他方、アラビア半島のペルシア湾沿岸においては、サウディ・アラビアやカタール半島では、ウバイド期以後の遺跡や遺物は、発見されていないようである。しかし、メソポタミアからはいっそう遠隔の、ペルシア湾の出口にあたるオマーン半島のアラブ首長国連邦のブライミー Buraimi 地方 (オマーン国との国境線に接するところ) でジェムデト・ナスル式の土器と見られるものが発見されている。そしてそれをまず発見したのは、やはりデンマーク隊であった。

デンマーク隊は1959年からオマーン半島西岸の南端に近いアブ・ダビ Abu Dhabi の沖あいにあるウンム・アン・ナール Umm an-Nar 島で、墳墓、ついで

29) 年代は Erich (ed.), *op. cit.*, pp. 176-177の表による。なお後述するブライミー地方の土器の研究を行ったカスペス女史は、原文字期後期を前3000-2900年ごろとしている (Caspers, *op. cit.*, p. 43)。また曾野氏は前2700年ごろシュメール人の都市が成立して、歴史時代に入っている (曾野著, 前掲書, 26頁)。

30) 曾野著, 前掲書, 23-27頁による。



住居址の発掘を行い、バハレーン島の最も古い文化に相当するものと考えられる文化を発見した。これはその出土した土器から、南バルチスターン方面で栄えたクルリ Kulli 文化と関連があるものと考えられたが<sup>31)</sup>、かれらは1962年にはさらにブライミー地方にも遠征の手をひろげ、そこの石塚墳墓でこんどはジェムデト・ナスル式の壺を発見したのである。

ブライミーはアブ・ダビから半島東がわのソハル Sohar にいたる、半島を東西に横断する交通路と、ホルムズ海峡に面する半島の先端から南下してマシーラ湾岸に達する、半島を縦断する交通路との交会点にあたっており、古来から交通の要衝を占めた、なつめやしの繁茂する肥沃なオアシスである。ここではハフイット Hafit 山の北がわ山麓に多数の石塚墳墓が密集しており、デンマーク隊は2年間に27基の石塚を発掘した。そのうちの22号墳で、肩部で稜の張った、竜骨形をした鋭角の胴と丸襟のような平らな口縁部をもった彩文土器2個を、青銅製剣1個、青銅製鉢3個、および飾りのついた滑石製の皿とともに発見したのである。かれらははじめ、伴出した青銅製剣がイランのルリスタン地方で発見される前2000年紀中ごろの剣に類

似しているところから、この剣がルリスタン方面から到来したものと考え、その到来の年代を前1300年ごろと推定し、壺も同じころにつくられたものであろうと考えた<sup>32)</sup>。しかし、その後1971年にこれらの土器を清掃して再検討した結果、これに彩文が施され、杏、赤、黒、白色の文様のあることが判明し、その彩文および器形からこれらがジェムデト・ナスル式の土器であることを認めたのである<sup>33)</sup>。したがって、これらの壺は後代になって青銅製剣などとともに副葬されたものであると考えられる。

その後、ブライミー・オアシスでは、さらに2個のジェムデト・ナスル式の土器が発見されて、この地方に南メソポタミアの原文字期後期の文化が波及した可能性をいっそう強めることとなった。この2個の土器については、カスパース女史の詳細な研究<sup>34)</sup>があるので、以下それによってその概要を述べてみたい。

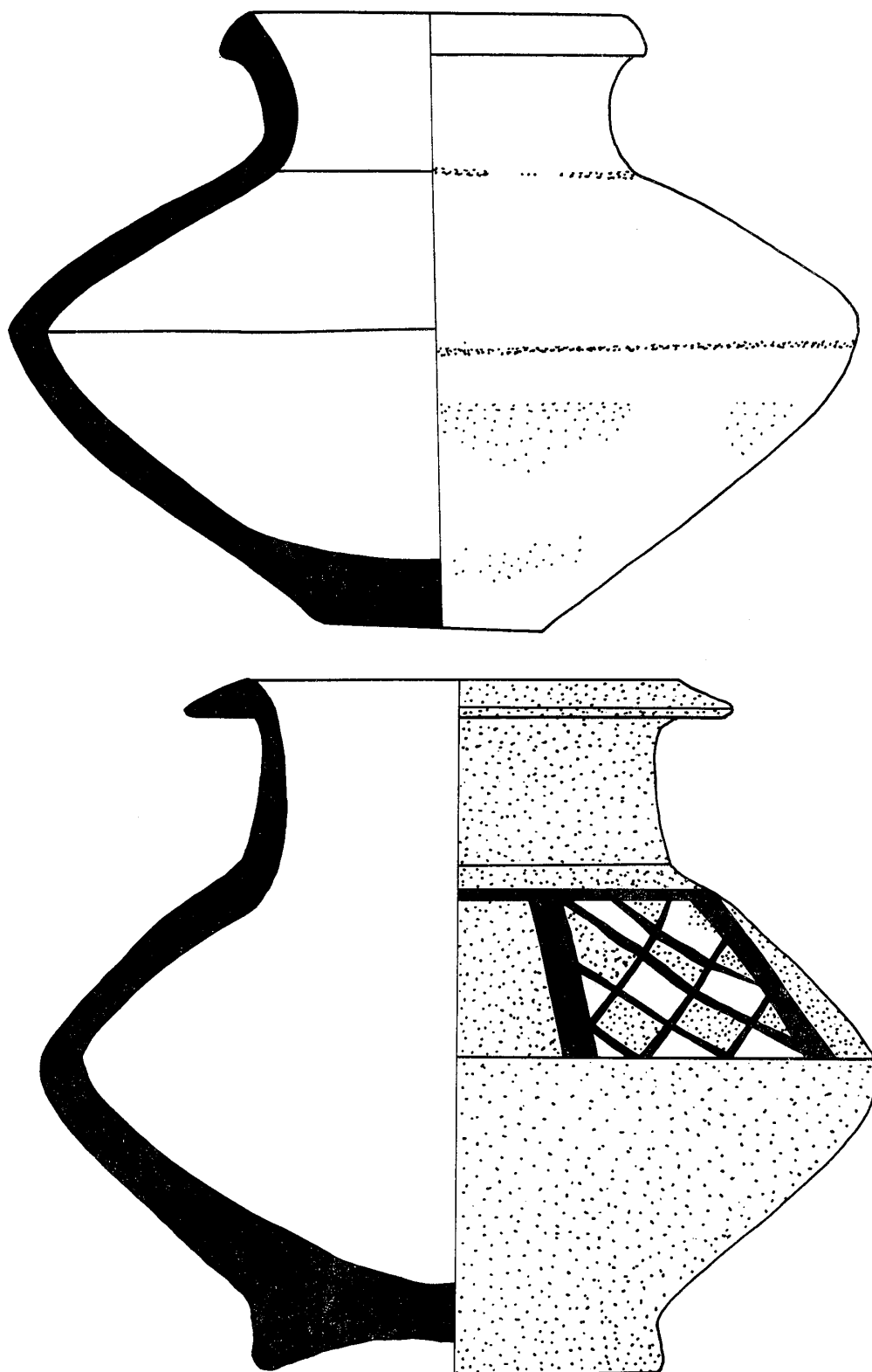
土器のひとつは1963年にオマーン偵察隊の S. Falla 伍長が開いた石塚から発見されたものである。この石塚はハフイット山に向かって Jahili 塞の南4.5キロほどの尾根にあり、高さ約4.50メートル、基底部の直径約5.50メートルの、この地方としては相当の規模のものであり、デンマーク隊の発掘したいくつかの石塚に相応するものと考えられる。この墳墓から遺骨——あまりにももろくて、年齢や性別は識別できなかった——とともに、頭部がへらの形をしたナイフ状の銅製品1個、および13個のビーズ玉、ならびに彩文土器1個が発見されたのである。ナイフ状の銅製品は、へら状の頭部が割れており、おそらく柄または把手として用いられたものらしく、その末端は丸く切断されている。ビーズ玉のうち1個は、白い斑点のある濃いオレンジ色をした瑪瑙製で、他の12個は横断面が0.4~0.5センチの、もっと小さな丸薬状のもので、緑がかった白色のペースト、おそらくフリット製である。また壺はおそらく轆轤を使用した竜骨形のもので、底部は小さな平底で、円筒状の短い頸部をもち、口縁部は一部破損しているが、外方へ反転している。烈け目に沿って一連の孔があるが、これは古代においてすでに修理され

31) G. Bibby, *op. cit.*, pp. 291-298 (邦訳, 288-294頁). なおペルシア湾をはさむアラビアがわとイランがわの両方の地域で発掘・調査を行っているデ・カルディは、ウナム・アン・ナールの土器について、「これらの遺跡からはふたつのすこぶる特色ある灰色土器が出土したが、一方は刻文、他方は彩文で、ペルシア領バルチスターンのバンプール Bampur に正確に平行しうるデザインをとまっていた。バンプールの証拠は、これらの土器の使用者がパキスタンのダシュト Dasht 河のかなたからきた移住民か、かの地方の住民と密接な接触をもっていたかのいずれかであることを示唆してくれた。湾の両がわでこれらの精巧な装飾をもった容器が出土したということは、それ自体は、南バルチスターンとオマーンの人々のあいだのなんらか人種的結びつきの証拠となるものではないことを、強調しておかなければならない」と述べて、ウナム・アン・ナールと対岸のマクラーン、バルチスターン方面との密接な文化的関連を認めているが、人種的な結びつきについては否定的に考えている (B. de Cardi, "Archaeological Survey in the Northern Trucial States" [*East and West*, New Series, Vol. 21, Nos. 3/4, 1971], pp. 235-236). なお上述のバンプールの遺跡は、オマーン湾に臨むイランがわのやや内陸部にあり、その発掘はデ・カルディの指導のもとに行われた。この発掘については、de Cardi, "The Bampur Sequence in the 3rd Millennium B.C." (*Antiquity*, XLI, 1969) を参照。この中でデ・カルディはウナム・アン・ナールとバンプールIVおよびクルリ文化との同時性を認めているが、バンプールにクルリ文化の要素が明瞭に現われるのは、次のV期であり、その年代は前3000年紀の終りごろであろうとしている (*Ibid.*, pp. 40-41).

32) G. Bibby, *op. cit.*, pp. 314-316 (邦訳, 311-313頁).

33) *Ibid.*, p. 401. (邦訳, 403頁).

34) 注26にあげた論文、とくにこの論文のうち、「Painted Vases and Other Funerary Deposits from Two Cairns near Buraimi in Trucial Oman,」「The Implication of the Presence of Late Protoliterate Polychrome Pottery in Trucial Oman,」および「Catalogue of Pots with which the Buraimi Pots can be Compared」の諸節を参照。



第3図 ブライミー出土のジェムデト・ナスル式土器（カスパースの論文による）  
（上：S. Falla 伍長発見，下：E. Buck 発見）

たことを示唆している。高さ10センチ、最大直径13.4センチ、口縁部の直径7.2センチ、底部の直径5センチである。地肌は明るいオレンジ色で、表面全体にクリーム色がかかった白色のスリップがかけられており（肩部に最もよく残っている）、その上に暗紫赤色の顔料が塗られていたようで、その痕跡が胴体の下部と底部に認められる。おそらくとは頸部の内外両がわおよび下方の部分と底部には、紫赤色の装飾が施されていたのかもしれない。また肩から最大直径にいたる部分は、いっそう精巧な装飾が施されていたのかもしれないが、その痕跡は残っていなかった<sup>35)</sup>。

第2の壺は1965年に E. Buck の発掘した石塚の墓室から出土したもので、伴出物は報ぜられていない。この壺は轆轤を用いて製作されたもので、やはり竜骨形をしており、底部はくぼみのある丸底で、頸部は円筒形をなし、口縁部は広くて丸く、外方へ反転している。肩の上部にプラスチックの小さな隆起がついている。高さ11.3センチ、最大直径13.8センチ、口縁部の直径9.3センチ、底部の直径6.8センチである。地肌はオレンジ色で、外がわの表面全部に明るい淡黄色のスリップがかけられていたらしい。胴体の下部から底部までの部分と頸部の内外両がわ、ならびに口縁部の上部には杏赤色の顔料が塗られている。肩から最大直径にいたる部分は、12個の長方形のパネルにわけられ、その上方と下方には杏色の顔料が塗られている。パネルは杏赤色の6個の長方形にわけられ、その周囲は暗褐色の帯線で囲まれている。3個のパネルにはダイヤモンド形の市松文様が見られ、その周囲は暗褐色に塗られ、中は杏赤色の顔料がいっぱいに塗られている。他の3個のパネルには斜平行線が見られ、やはり暗褐色の顔料が塗られている。肩の部分には磨研した痕跡が認められる<sup>36)</sup>。

以上に述べたブライミー出土の2個の壺は、南メソポタミアや北メソポタミアのディヤラ地方から発見される、原文字期CおよびDの、平底もしくは丸底で、ずんぐりした竜骨形をなし、円筒状の頸部、広くて外方へ反転している口縁部をもった壺と、その器形がきわめて類似しており、この類似は、まったくの偶然とは見えないと、カスパースはいつている<sup>37)</sup>。しかし、原文字期CおよびDのジェムデト・ナスル式の彩文土器には、カスパースによれば、3つのカテゴリーがあ

り、ブライミーの2個の壺は、そのうちの第1のカテゴリーに属するものと考えられる。このカテゴリーに属する土器は、ずんぐりした球形もしくはむしろ鋭い竜骨形をなした壺で、円筒状の頸部と反転した、あるいは広幅で斜状を呈する口縁部をもっている。高さは10センチ以下から1メートル近くまでさまざまであり、底部は通常平底であるが、時には平らもしくはくぼみのある丸底をなすものもあり、とくに原文字期Dのものがそうである。肩の上部にはしばしばプラスチックの隆起が見られ、そこには時に等間隔で4個の飾り鉾または4個の小把手がついている。壺の地肌は明るい赤色または淡黄色で、通常よく磨研されており、胎土にはしばしば石灰または灰が混入されている。クリーム色または赤色のスリップが容器全体にかけられており、その上に黒と赤の多彩な文様が肩と胴体の上部のあいだに描かれている。また時には黄色い黄土が黒と赤の文様の素地として用いられていることもある。頸部および口縁部の内外両がわ、および胴体の下部から底部までの部分は、紫赤色もしくは杏赤色に塗られ、また表面全体に縦横に磨研されたあとが見られる。垂直をなしたパネルは帯状でしきられて、そこに多彩の文様が描かれているが、文様はほとんどが幾何文で、基盤縞文、ジグザグ文、菱形文からなっている。また連続した三角形、斜格子、山形、砂時計型の文様も見られる<sup>38)</sup>。

カスパースはこのように述べて、ブライミー出土の2個の壺は第1カテゴリーに属するものと推定したが、女史はさらに南北メソポタミアのこの種の土器の出土や層位などについて、綿密な比較検討を加え、結論として、ブライミーの2個の壺はジェムデト・ナ

38) *Ibid.*, pp. 35-36. なお第2カテゴリーに属するものは、4個の隆起が見られる竜骨形もしくは二重の竜骨形容器で、あるいはまた丸い胴体と短い頸部と竜骨状の口をもった容器群からなっている。底部は通常平底であるが、時に丸底もある。明るい赤色または淡黄色の地肌に、多彩か単彩（通常茶褐色、まれに赤色）の文様が描かれ、文様には幾何文のほか植物、動物（山羊、小山羊、鳥、魚、さそり）、眼、星などが見られる。通常磨研されていないが、クリーム色のスリップや暗赤色の顔料でおおわれているものには、磨研されたものもある。第3のカテゴリーに属するものは、球形または細身のさまざまな注口土器で、口縁部は外方へ突き出ているか反転しており、まれに把手のあるものもある。幾何文もしくは形象文の単彩の装飾が容器の上部に描かれており、まれに胴体の主要部分にまでひろがっている。明るい赤色または淡黄色の地肌に直接文様が描かれるか、薄く明るいスリップの上に描かれたものもある。表面は磨研されていない (*Ibid.*, pp. 36-37).

35) Caspers, *op. cit.*, pp. 28-29.

36) *Ibid.*, p. 29.

37) *Ibid.*, p. 34.

スル式土器の盛熟期の特徴——すこぶる明るい赤色顔料の使用、磨研の欠如、栓状のものをともなう隆起、もしくは孔のない4個の把手——をそなえていないので、おそらく原文字期Dの早期の段階に属する可能性があるかと推定している。もっとも Falla 伍長の発見した第1の壺は、その単純な形態から見て、原文字期Cに属すると考えることもでき、また Buck の発見した第2の壺は、外方へ反転した幅広の口縁部とくぼみのある丸底から、原文字期Dのうちに入るものといえたと述べている<sup>39)</sup>。

なお、カスペースのこの論文は、デンマーク隊がこれらの発見した壺をジェムデト・ナスル式のものとする以前に書かれたものであるが、女史はデンマーク隊の発見した壺も、その発見地が Falla 伍長の発見した壺と地域を同じくしていること、それらが発見された石塚墳墓の規模や構造が類似していること、壺の形態や色が類似していることを指摘して、デンマーク隊の発見した2個の壺も、上述の2個の壺と同様に、原文字期後期に属する可能性があることを示唆している<sup>40)</sup>。

以上に述べたところから、オマーン半島のブライミーで発見された壺形土器は、前4000年紀の末期から前3000年紀の初頭ごろにあたると思われる、メソポタミアの原文字期C Dに属する彩文土器のカテゴリーに入ることは、疑いないようである。そしてカスペースの説いているところからすれば、原文字期C Dのうちでも、むしろCの末期かD、すなわち原文字期後期のうちでもとくにその後半のものと考えることができよう。したがって、年代的には前4000年紀の末というよりは、むしろ前3000年紀の初頭ごろと考える方が妥当のように思われる。

それでは、ブライミーのこれらの土器は、どこでつくられたものであろうか。すでに述べたように、ブライミーに近いウンム・アン・ナールでデンマーク隊の発見した土器は、同様に前3000年紀のものではあるが、もっとのちのもののように見える。ブライミー地方の石塚古墳でも、ウンム・アン・ナール出土のものと同種の土器片が石塚上に散布しているものもあると、デンマーク隊は報じており、また墳墓の構造は異なっているが、埋葬室には同型のものもあったことが判明したというが<sup>41)</sup>、ウンム・アン・ナールの灰色土器は前

3000年紀の後半、あるいは末期に近いころのものようである<sup>42)</sup>。いずれにしても、原文字期後期の土器は、北東アラビアではブライミー以外にはまだ発見されていないので、現在の段階では、ブライミーの壺形土器はメソポタミア方面から到来したものと考えるのが、妥当のように思われる。またメソポタミア方面からの到来品であるとするれば、それがどのような経路をたどってきたかが問題であるが、この場合は陸路よりはむしろペルシア湾を海路輸送されてきたとする方が、可能性が強いように考えられる。オマーン半島へはカタール方面から沿岸ぞいに通じる陸路もあり、この陸路はアブ・ダビを経て、半島西岸ぞいに半島の北端近くまで延びている。またアブ・ダビからブライミー方面へ通じるルートがあったことは、すでに述べた通りである。しかし、IIで述べたように、すでにそれよりもはるかに早い時期に、サウディ・アラビアの沿岸とメソポタミアとのあいだには、海上交通が行われた形跡が考えられる。そうだとすれば、この長い期間を通じて、ペルシア湾の沿岸航海がしだいに延び——遺憾ながらその間の事情を語る資料は、現在のところ発見されていないが——前3000年紀のはじめごろには、それがついにオマーン半島西岸まで達したと考えることが、できるのではなからうか。

このことと関連して想起されるのは、前3000年紀の後半に入ると、メソポタミアの泥章にマガンとの経済的・政治的交渉に関する記録が見られ、そのマガンをオマーン半島に比定する説があるということである。すでにIで述べたように、アッカド王朝のサルゴン大王の治世には、マガンからきた船が首都アガデに停泊しており、またナラム・シンはマガン征服の記録を残している。その後の記録にも、ラガシュ第2王朝のグデア Gudea (前2220年ごろ) はマガンから  $na_4ESI$  (閃緑岩と考えられる) をえて、自分の彫像をつくらせたことが記され、ウル第3王朝のイッビ・シン Ibbi-Sin (前2029-2006) の治世には、マガンの銅と交換するために、衣服と羊毛が送られたことや、マガンから玉ねぎと葦が輸入されたことが記されている<sup>43)</sup>。またシュメールの神話や文学資料の中にも、マガンがメルッハやディルムンとともにしばしば登場する。たとえば、『ギルガメシュと生者の国』には、「マガンの船が沈んだあとで、船『Maghilum の力』号が沈んだあとで」とあり、神話『エンキ Enki とニンフルサグ

39) *Ibid.*, pp. 42-43.

40) *Ibid.*, p. 43.

41) Bibby, *op. cit.*, pp. 316-317 (邦訳, 315-316頁).

42) 注31を参照.

43) J. Hansman, *op. cit.*, p. 556.

Ninhursag』の末尾には、「ニントウラ Nintulla をマガンの王たらしめたまえ」とある。あるいはまたこの神話の未刊行の1節には「マガンの王をしてあなたのもとに力強い銅、……の力、閃緑岩、u石、およびshuman石をもたせたまえ」と記されている<sup>44)</sup>。これらの記事は、マガンがシュメール時代のメソポタミアによく知られており、とくに両者のあいだに海路による貿易関係があり、銅や閃緑岩、その他の産地として知られていたことを示してくれる。

ところで、シュメール時代にメソポタミアで用いられた銅は、ニッケルを多量に含んでいたことが、分析の結果明らかにされた。たとえば、ウルの初期の墳墓から出土した標本では2.20パーセント、キシユの墳丘Aからえられた標本は3.34パーセントのニッケルを含んでいたし、またその他の遺跡からえられた標本にも、上記のものほど多量ではないが、0.25パーセント程度までのニッケルを含んでいた。これに対して、小アジアのアンゴラ付近およびユーフラテス河とティグリス河の上流にはさまれたアルガナ Arghana でえられた銅鉱には、ニッケルは皆無もしくはきわめて微量(0.03パーセント)しか含まれていなかった。他方、アングロ・ペルシア石油会社の委嘱で地質調査を行ったリース G. M. Lees が、オマーン半島のソハルから内陸に入ったワデイ・アヒン Wadi Ahin のマアダン Ma'adan 山で、むかし採掘された銅山から採集したスラッグと鉱石の分析の結果は、スラッグは少量の銅以外、ニッケルを含んでいなかったが、鉱石は銅1.50パーセント、ニッケル0.19パーセントを含んでいた。ハロルド・ピークは以上の分析の結果から、シュメール人は銅をオマーン方面から獲得した可能性があると考え、かつマアダン山の付近に Makanyat という町(または村)があるところから、Magan (Makan) の名称が Makanyat と関連があるのではなかろうかと推定している<sup>45)</sup>。

オマーン半島では、マアダン山の南東75マイルほどのアフダル Akhdar 山にも古い銅山があり、両鉱山はブライミーからそれほど遠くはなれていない。もちろん、これらの鉱山が前3000年紀に採掘されたという証拠はないが、カスパースはその可能性は強いといい、前3000年紀のシュメールへの銅の供給地としてオマーン半島を考慮することができるといっている<sup>46)</sup>。こ

れに反してJ. ハンスマンは、マアダン山の鉱石の0.19パーセントというニッケル含有量は、シュメールへの銅の供給地のものとしては低すぎると考えて、これに否定的な見解を示している。そしてモヘンジョ・ダロで発見された未加工の銅塊3個の分析によってえられた0.31, 1.06, および1.27パーセントのニッケル含有量から、インダス文明地帯への銅の供給地と考えられるバルチスターン地方が、シュメールへの銅の供給地でもあったろうと推定している<sup>47)</sup>。バルチスターンのナール Nal 墳墓出土の銅器の分析の結果は、4.80パーセントという高いニッケル含有量を示したというから<sup>48)</sup>、この方面にメソポタミアへの銅の供給地を考えると可能であろうが、シュメールの銅の分析の結果が、3.34パーセントから0.25パーセントまでのさまざまのニッケル含有量を示していることからみて、マアダン山の銅鉱のニッケル含有量は、必ずしもシュメールへの銅の供給地として低すぎるといえることにはならないのではなかろうか。もっともわずかに1個の標本の分析結果だけで、マガンをオマーンに比定することが行きすぎであることは、いうまでもなからう。カスパースもイランの諸所に銅鉱のあることを指摘し、とくにケルマン南方のバハル・アスマン Bahr-Asman 山中およびオマーン湾から内陸に入ったバンプールの遺跡の北西方にある銅鉱が、その地理的位置からみて、海路によるシュメールへの銅の供給地として考えられることを注記している<sup>49)</sup>。またホルムズ海峡から30マイルほど北東にあたるイランのファリーヤブ Farīyāb 村の付近にも、3カ所の銅鉱のあることが報ぜられている<sup>50)</sup>。したがって、マガンをオマーン半島およびその対岸のイランのマクラーン地方を含めた地域として考えることも可能であろう。そしてこの場合、Magan (Makan) と Makran とのあいだに、音の類似が見られることが、注意されよう。

オマーン地方では、東岸のマスカトに近い地域に凍石のあることも報ぜられている<sup>51)</sup>。凍石はメソポタミ

46) Caspers, *op. cit.*, p. 30.

47) J. Hansman, *op. cit.*, p. 561. ハンスマンはこれによって、同じく銅の産地とされているメルッハを、パキスタン領バルチスターンに比定する根拠のひとつとしている。

48) Stuart Piggott, *Prehistoric India to 1000 B. C.*, Pelican Book, 1950, p. 90. 曾野著, 前掲書, 46-47頁.

49) Caspers, *op. cit.*, p. 30, note 34.

50) *The Cambridge History of Iran*, Vol. I. *The Land of Iran*, Cambridge, 1968, p. 503.

51) G. E. Pilgrim, "The Geology of the Persian

44) R. N. Kramer, *op. cit.*, pp. 277-279.

45) Harold Peake, "The Copper Mountain of Magan" (*Antiquity*, Vol. II, 1928), pp. 452-457.

ア、イラン、インダス河流域などで、印章、その他のさまざまな工芸品の素材として広く用いられたもので、カスパースは凍石もメソポタミアへオマーンから輸出された可能性があることを指摘している。もっともカスパースは同時にイランにも諸所に凍石の産地があり、たとえばイラン南西部のヒチャン Hichan およびニクシャハル Nikshahr のものが、海路ペルシア湾を通過してメソポタミア方面へ送られたことも考えられるといっている<sup>52)</sup>。さらにまたカスパースは、オマーン半島の火成岩の多くが、色彩および組成の類似、ならびにそれが彫刻に適していることのゆえに、地質学者以外のものから容易に閃緑岩と間違われるとの地質学者 G. Evans の説明を紹介している<sup>53)</sup>。閃緑岩もマガンからの輸入品の中に見出されることは、すでに述べた通りである。

以上に述べたように、オマーン半島とシュメール、バビロニア時代のメソポタミアとのあいだには、ペルシア湾を介して海上の交通・貿易の行われた可能性が考えられる。もとよりその証拠はまだすこぶる僅少であり、また決定的なものではなく、オマーンがマガンであるとの決定的な証拠があるわけではない。しかし、メソポタミアに銅、その他を供給したマガン、オマーンおよびその対岸のイランのマクラーン地方を含めた地域と推定することは、それほど無理なことではないであろう。とくに前3000年紀の後半から2000年紀の間ごろにかけて、ペルシア湾からさらにその外がわのオマーン湾およびアラビア海方面とのあいだの海上交通および貿易は、文献および考古学のさまざまな資料から、否定することはできないであろう。そのような一般的状況からみて、オマーン地方とメソポタミアとのあいだのペルシア湾を介しての交通・貿易は、前3000年紀の後半においては、十分考えられるといつてよからう。

このような推定の上に立って、プライミーにおけるジェムデト・ナスル式の壺形土器の発見を考えてみると、メソポタミア—オマーン間の海上交通および貿易を、さらに一歩進めて、前3000年紀の前半、おそらくその初頭までさかのぼらせることが、できるのではなからうか。証拠はきわめて乏しいが、すくなくともオ

マーン地方にジェムデト・ナスル式の土器がもちこまれたことは、否定できないと考えられ、それらはおそらく海上を輸送された可能性が強いといつてよからう。カスパースは「前3000年紀および2000年紀の楔形文字のテキストにくり返し述べられている、メソポタミアとペルシア湾およびそのかなたの地域との海による接触および貿易関係の多くが、原文字期後期にうちたてられていたことが明らかとなった<sup>54)</sup>」と述べて、上述の可能性を積極的に肯定している。

#### IV む す び

以上、アラビア半島のペルシア湾沿岸における近年の考古学的成果にもとづいて、黎明期におけるペルシア湾の海上交通および貿易について、若干の考察を加えてみた。アラビア半島のペルシア湾沿岸の考古学的調査・発掘は、この地方の石油ブームと独立的気運を背景として、第2次大戦後ようやく盛んになってきた。その結果、サウディ・アラビアからカタール半島にかけて、ウバイド式土器がかなり広範囲に分布していることが明らかとなり、オマーン半島ではジェムデト・ナスル式の土器が発見されるにいたった。従来、ペルシア湾、オマーン湾、およびアラビア海を通しての海上貿易は、メソポタミアの初期王朝時代の末ごろから、すなわち前3000年紀の中ごろ以降からの状況が明らかにされつつあったが、それはさらにいっそう早い時期にさかのぼることが、推測されることとなったのである。証拠はまだきわめて乏しいけれども、前5000年紀のいつごろかから、メソポタミアとサウディ・アラビアのペルシア湾沿岸とのあいだに、海上交通や貿易の行われたことが推測され、さらに前3000年紀のはじめごろには、この交通・貿易はさらにオマーン半島まで延びた形跡がうかがわれるのである。いずれにしても、ペルシア湾貿易の歴史は、従来考えられていたよりは、はるか以前、じつに前5000年紀までさかのぼることが推測されるのである。

それではこのような早い時代に、ペルシア湾の海上交通や貿易を促進したファクターはなんであったろうか。このことはもとより推測するよりほかはないが、沖積平野のメソポタミアに鉱物資源などがなかったことと関連があるように思われる。毎年くり返されるティグリス、ユーフラテス両大河の定期的氾濫は、この地方に肥沃な土壌をもたらして、豊かな穀物を提供し、またその岸边には栄養分豊かなつめやしがつ

Gulf and the Adjoining Portions and Arabia” (*Memoirs of the Geological Survey of India*, XX XIV, Part 4, 1908), pp. 86-101 (Caspers, *op. cit.*, p. 30 による)。

52) Caspers, *op. cit.*, p. 30.

53) *Ibid.*, p. 33.

54) *Ibid.*, p. 33.

た。しかし、そこには木材もなければ、泥土以外には金、銀、銅、その他の鉱物資源は皆無と云ってよい状態であり、それらは外界から輸入されなければならなかった。木材はシリア方面から、また鉱物資源はイランやアナトリアなどからもたらされたが、それとならんでペルシア湾の周辺の地域からも供給されたのであろう。またペルシア湾は真珠の産地でもあった。これらの物産の獲得欲が、ペルシア湾の海上交通と貿易をきわめて早い時代から促進したものと考えられる。

カスパースは、ペルシア湾のイランがわの自然的諸条件は、古代の船舶にとって航行をきわめて困難なものにしたので、早期にはアラビア半島沿岸ぞいの航海が行われたのではなからうかと示唆している。すなわちイランがわでは、沿岸から約250キロのあたりを南北にザグロス山脈が走っているが、そこからわかれた支脈が沿岸に向かって延びており、所々に幅わずか1.5ないし3キロ程度の平野を残しているだけにすぎず、しかもそこには湿地や鹹湖などが点在している。沿岸地帯は不毛で、水の供給も十分ではない。停泊地や井戸もほとんどなく、夏のあいだは強い南風が吹きつけて、海上の航行を危険にする。そのうえ、沿岸と内陸とを結ぶ自然の交通路もほとんどない。またこの沿岸では、小さな溪谷が沈泥作用によって埋められた以外、海浜は過去数千年のあいだほとんど変化をこうむることはなかったという。これに対してアラビアがわでは、沈澱物の速やかな堆積のあとが見られ、沿岸にはサブハ、すなわち塩の平野が過去4000年にわたって、沿岸から5キロ、場所によっては20キロもひろがっているが、5000年以前には海岸線はもっと奥地の方を走っていた。現在はこの方面の海域では、沖あいの島々は浅瀬や潟や珊瑚礁に囲まれていて、土民の船で

さえ島に接近するのが困難であるが、いまから5000年以前はこれらの島々と沿岸とのあいだの航行は、今日よりはるかに容易であったろうと云っている<sup>55)</sup>。このような自然の諸条件から見れば、航海術の未発達な早期においては、ペルシア湾の航行はイランがわよりはむしろアラビアがわを通過して行われていたものと思われる。アラビア半島がわに、ウバイド式土器やジェムデト・ナスル式の土器が発見されるのは、そうした自然的諸条件によるところが大きかったのかもしれない。

<追記> 本稿を提出したあとで、J. Oates, T. E. Davidson, D. Kamili and H. Mekerrell, "Seafaring Merchants of Ur?" (*Antiquity*, Vol. LI, No. 203, 1977) を入手した。この論文は北東アラビアのウバイド式土器について、Research Laboratory, National Museum of Antiquities of Scotland の Dr. Mekerrell らおよび Massachusetts Institute of Technology の Dr. Kamili らによって行われた neutron activation and petrographic analysis の結果について述べたものである。自然科学に関する知識に乏しいわたしには、このような科学的操作については理解しにくいことが多いが、この分析の結果、北東アラビアのウバイド式土器は、その全部ではないにしても、大部分がメソポタミアでつくられたものと考えられることである。そしてこのことから、執筆者たちはウバイド期のシュメール人が実際にこれらの土器を携えて北東アラビアへやってき、アブ・ハミスやドサリヤーには相当長期間滞留したのち、真珠や魚などをもって再び帰国したものであろうと推定している。詳細については別の機会に譲りたいが、いちおう簡単にこのことを追記しておく。

55) *Ibid.*, pp. 22-24.